Japanese Association of Russian Scholars

『罪と罰』における「子供」の問題

——リザヴェータについて——

萩　原　俊　治

主人公が金貸しの老婆を殺すさい，その妹のリザヴェータまでも巻きぞえにして殺してしまうというストーリーは「罪と罰」のための創作ノートの殆んど初めの部分（1865年の8月から10月にかけてのノート。現在刊行中のナウカ版全集第七巻による）に現われている。

一方，この伏線をドストエフスキイがシャーシャというリザヴェータの私生児によって生かそうとしていたことも，1865年の8月から12月までのノートに現われている（上記全集の77頁目から143頁目までの間で12回シャーシャについては触れられている。ここのノートの上記全集の並べ方には不審な点があるが，筆者にはその正邪が判断できない）。

しかし，その同じ年の11月に，ドストエフスキイがそれまでのプランを大幅に変更するという出来事がある。我々が現在読んでいる形での「罪と罰」を書きはじめたその時期と，シャーシャが創作ノートから消えた時期とが一致するか否かは明らかではない。ただ，上記全集の創作ノートの配列が正しいのならば，ドストエフスキイは「ロシア報知」に原稿を送りはじめた12月においても，まだシャーシャに未練を残していたことになる。

つまり，作者はシャーシャが小説に入ってくる可能性を排除しないで我々が現在読んでいる形での「罪と罰」を書きはじめたことになる。そして，結局シャーシャは使われなかった。上記全集に従えば，そうなる。

ドストエフスキイは，あらかじめ小説の広がりと深まりを確保しておくために，主人公にリザヴェータを殺させたのだろう。しかし，シャーシャという，主人公にリザヴェータを殺したことをいつも思いおこさせる少女を，理由はわからないが（「虐げられた人々」のネリーの繰り返しになることを避けたのかもしれない）登場させなかった結果，最終稿においては，リザヴェータ殺しという伏線を別の形で展開させて行かなければならなくなった。

それがどのように展開しているのかを本小論では見てゆく（「罪と罰」最終稿は上記全集第六巻を用いる。長い引用をする場合はその末尾に全集第六巻の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

頁数を打つ)。

1

最終稿において，リザヴェータという伏線はどのようにして与えられているのか。三十五歳，未婚，大女（1m8Ccm)，無恰好な身体つき，色黒，不美人，但し顔と眼が善良そのもの。善良，正直，温和，従順，臆病，小さな子供のよう，少し頭が足りない，男と簡単に寝ていつも妊娠している。自己犠牲的。このように好ましい性格を付与されたリザヴェータが，主人公の金貸しの老婆殺害に巻きこまれて殺される。

金貸しの老婆が殺される場面と，リザヴェータのそれとは対照的だ。主人公は金貸しを殺そうと思って殺す。なかば無意識に，ほとんど機械的に力もこめず，老婆の「背後から」顔も見ないで斧を振りおろす。

主人公はリザヴェータを勿論殺すつもりはなかった。しかし動転したラスコーリニコフは彼女に斧を振りあげる。この斧を振りあげてから振りおろすまでの一瞬が，老婆の場合とは異なり，主人公の意識の中でゆっくりと過ぎてゆく。彼はその一瞬において相手の顔のうごき，かすかなしぐさまでも見のがさない。

「彼女のくちびるは悲しげに歪んだ。とてもちいさな子供たちが何かにおどろき，そのおどろくべき何かをじっと見つめ，いまにも大声で泣きだしそうなときのくちびるのように歪んだ。」(65)

ラスコーリニコフはこの思いがけない殺人行為によって更に動転する。しかし伏線としてはこれだけだ。

主人公がリザヴェータを殺したことについて考えはじめるのは，小説がようやく第三部の終りにさしかかってからになる。

「……それにしても奇妙だ。なぜおれはリザヴェータのことについて殆んど考えないのだろう。まるで殺しもしなかったみたいに。……リザヴェータ，ソーニャ，あわれな優しい，優しい眼をした女たち」(212)

何故，彼はリザヴェータのことについて殆んど考えないのか。何故，まるで殺さなかったように感じるのか。この問いに対する答は小説のここまでの部分には見つからない。更に先の，主人公がソーニャに自分の犯罪を打ち明けようとする場面に至って初めて，その答らしきものに出会う。

「ふたたび以前感じたことのある或る感覚がいきなり，彼のたましいを凍りつかせた。ソーニャを見つめていると思いもかけずその顔の中にリザヴェータの顔が見えたように感じたのだ。あのとき自分が斧を持って近づいていったと

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

きのリザヴェータの顔をハッキリ思いだしたのだ。」(315)

これが何故答らしきものかというと，ここの所に，主人公によるリザヴェータとソーニャの同一視が現われ，これに従うと次のような解が得られるからだ。

ラスコーリニコフは無意識のうちに，殺したリザヴェータをソーニャの中に見ていた。リザヴェータの姿はソーニャの内に解消されていたので，彼は無意識のうちにソーニャと共にリザヴェータも生きていると感じていた。ソーニャという存在にさえぎられて，その中のリザヴェータについて考えることもなかった。しかし，告白の直前になって，彼の無意識の帷が揺れ，ソーニャの中からリザヴェータが現われた。〔答の１〕

しかし，答らしきものと言ったのは，上のような解が得られるためばかりではない。主人公はソーニャに必ず告白すべきであったし，そのさい彼女の中にリザヴェータを見なければならなかった，と読者が（理由不明ながらも）感じざるをえないからだ。この印象が薄ければ，答らしきものを第三章の終りにまで溯及させても余り意味がない。ところで，その印象は非常に強いのである。このためそれを第三章の終りにまで溯及させても構わないと（再び理由不明ながら）感じざるをえない。

だから，まず何故そのような印象が生じるのかについて検討しなければならない。これを問題点１としよう。次に，告白直前のその答らしきものを，果たして第三章の終りにまで溯及させられるのか否かについて。これを問題点２とする。それから後，ふたたび〔答の１〕を検討してみよう。

主人公がソーニャの中にリザヴェータを見た（仮にこれを同一化と呼ぶ）からには，何か理由があるのだろう。

まず同一化を助けるものとしてソーニャとリザヴェータの多くの共通点があげられる。ピースの整理したものを利用すると(1)，この二人の共通点は，１．性格（自己犠牲的，謙譲，思いやり），２．〈堕ちた女〉，３．〈神がかり（ユロージヴイ)〉，４．霊的姉妹（十字架交換），５．聖書（リザヴェータがソーニャに与えた），である。

しかし，二人の相違点も同じくらい数えあげられる。リザヴェータが白痴に近いのに対し，ソーニャは全くそうではないし，ソーニャが家族のために娼婦にならざるを得なかったのに対し，リザヴェータが男と寝るのは金のためではなくその白痴のごとき善良さのためだ。リザヴェータがユロージヴイであるの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

は確かだとしても，ソーニャはただ信仰心があついというだけのことで，主人公が彼女を「神がかり」であると決めつけるだけだ。

更に二人の容姿は全く正反対だといえる。リザヴェータの大柄に対して，ソーニャは小柄であり，前者が「化けもの」のような顔をしているのに対し，後者の美醜は不明だが（作者は主人公の同一化が進むにつれてソニーャを美人から不美人に変えてしまっている）少なくとも「化けもの」ではない。ただ，ここで注意すべきは，この二人の女の無邪気で善良な表情が類似のものとして強調されていることと，二人に「子供のような」という形容がさかんに付されていることだ。

また更に，二人の社会における位置が類似していると言えるかもしれない。しかし，これも非常に大雑把に分類すればそうも言えるかもしれないというほどのことだ(2)。

リザヴェータはその正直さのために繁盛している古着屋であり，また，ともかくも金貸しの老婆の妹である。ソーニャの家庭の凄じい貧しさとくらべると，リザヴェータの生活は遙かに安定していると言える。

以上のように二人は余り似ているとは言えない。従って，主人公の眼に二人が似て映るためには，主人公に自発的な意志がなければならなくなる。つまり，主人公の側に二人をどうしても同一化しなければならぬ理由があり，そのため，二人の共通点のみに注目し，それを誇張化し（例えば「神がかり」のソーニャ），そこで初めて同一化が完成する，と考えるべきだろう。

ところが，その二人をどうしても同一化しなければならぬ理由については，小説で一切触れられていない。ただ同一化の結果しか述べられていない。

このように，主人公の視点に立っている限り同一化の理由は存在しない。主人公はただ偶然ソーニャの中にリザヴェータを見たのにすぎないことになる。では，何故それが読者には必然と感じられるのだろう。

2

これはその出来事の成起する「法則」が読者に判かっているためだろう。主人公は目の前に展開している出来事（ソーニャの中にリザヴェータが見える）と過去の出来事（殺人のさいのリザヴェータの顔）を結びあわせて「偶然の一致」であると思うだけだが，読者には，殺人の場面の構造が予め判かっているため，それと類似の告白の場面に起こる出来事を法則化して把握することができるためだろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

ふたたびピースの整理したものを利用すると[3]，その二つの場面の類似点は次の二つになる。1．試しの訪問の存在（殺人の前の訪問では，次に来るとき銀のシガレット・ケースを持って来ると言い，告白の前の訪問では，次に来るとき，誰がリザヴェータを殺したかを言うと告げる）。また，殺人の場面の終りでは，ベルが鳴り，告白の場面の終りではレベジャトニコフがドアをノックする。2．主人公は犯罪を犯さねばならないと感じ，またソーニャに告白をしなければならぬと感じる。この二つの不可避性の類似。

しかし，このような二つの場面の図式的な類似だけで我々は主人公の「偶然」を「必然」に転化できるのだろうか。

言いかえればこうなるだろう。主人公にはリザヴェータがソーニャの中に偶然見える。一方，読者には主人公がそうなる前からピースほどではないにしても何らかの法則性がその場面に感じられる。そして告白の直前，主人公にはリザヴェータがソーニャの中に見え，彼は架空にではあるが再びリザヴェータを殺そうとする。そして無言のうちに告白がなされる。このあたりで読者はもうこの場面の法則性を確信してしまう（仮に，法則化と呼ぶ）のである。法則化がなされた瞬間に主人公の「偶然」は「必然」に転化される。つまり，二つの場面の図式的な類似が頭に入っているから法則化するのではなく，告白直前の文章が読者の眼にふれた瞬間，法則化がなされ，読者は主人公にリザヴェータが見えたことを「必然」と感じてしまう。図式的な類似は補助的なものでしかない。これはおおかたの読者が告白直前の文章を読むときに抱く通常の印象だろう。では何故このような印象が生じるのか。

これは先に述べた「同一化」の場合と同様の「心理的な力学関係」が読者とテキストの間に生じるからだ。同一化の場合は，リザヴェータとソーニャの個人的な類似に，主人公の側の意志の働きが加わって初めて同一化が完成する，と考えられた。いま，これと同じことが想定される。殺人の場面と告白の場面という二つの場面の類似に，読者の側の意志の働きが加わって初めて，告白の場面の法則性が確信されてしまうのだ。つまり法則化が完成する。その「読者の側の意志の働き」とは，告白の場面の法則性を一挙に察知し，その法則性を「確信しなければならぬ」と言うところまで自らを読者が自発的に高めようとする働きのことだ。（この働きがなければ，それは芸術作品ではなく，論理学になる。）そのような意志が普通の読者においては，告白の直前の文章で生じるのだろう。ではその意志を読者に引き起こすものとは何だろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

3

第1節で引用した，ソーニャの中にリザヴェータが主人公には見える，と云う文章の続きは次のようになっている。

「リザヴェータは彼から離れ，壁の方へ退いていった。片手を突きだし，顔には全く子供のようなおどろきの色があった。それはちょうど，ちいさな子供が不意に何かにおどろき，そのおどろくべき何かをおそるおそるじっと見つめあとじさりし，ちいさな手を突きだしいまにも泣きだしそうな時に，それはそっくりだった。ほとんどそれと同じことが，いま，ソーニャにも起こった。」(315)

ここで明らかになるのは，彼が殺そうとして向いあったのは，リザヴェータという三十五歳になる大女の顔ではなく，その顔の中にあらわれた子供の顔であるということだ。子供のような顔を見つめながらも，彼が斧をふりおろしたということだ。

ソーニャもリザヴェータと同じように片手を突きだし退いてゆく。恐怖にみちた子供の顔で彼を凝視する。すると，

「ソーニャの愕き(ウージャス)は不意に彼にも伝わった。全く同じおどろきが彼の顔にも現われ，全く同じように彼女を見つめはじめ，彼女とほとんど同じ子供のような，微笑さえ浮かべた（訳注：ソーニャは勿論微笑していない）。

『わかったか』彼はやがてそうささやいた。

『おお，神よ』怖ろしい悲鳴が彼女の胸からあふれでた」(315，傍点部は原文ではイタリック)

「全く同じおどろきが彼の顔にもあらわれ」という文章の中の「全く同じおどろき」とは恐怖にみちた子供の顔に現われるおどろきを指している。彼のこの恐怖にみちた子供の顔が「子供のような微笑」に変るその一瞬のハザマにおいて，告白がなされる。

以上二つの引用文を整理してみよう。主人公は斧をふりおろす瞬間，リザヴェータの中に子供の顔を見ながら，斧をふりおろしてしまう。ふたたび，ソーニャを介して彼はリザヴェータの中に子供の顔をみる。彼は架空の斧をふりあげている。ふりあげ，子供の顔が目に入り，子供の恐怖にこわばった顔が主人公の視界の中でみるみる膨張し視界全体にあふれ，ふりおろす。一瞬のことだ。彼はこの過去の一瞬における自分の感情をハッキリ思いだす。子供の中にこめられているもの一切[4]を拒否し，自分をそれらから切り離そうとしているのだ。主人公のこの感情は読者にもつたわる。ここにおいて，我々もまた「弱き小さき者の友であり草花や動物の友」であったことを，直截に認め[5]，主人公の恐

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

怖にみちた顔をそれはそうでなくてはならない，と自ら進んで，しかしひそかに，確信しようとする。読者のこのような生の最も原形的な問題に向かいあった場合の無意識の自発性が小説の一地点にリアリティを与える。

一地点とは主人公が子供の顔を見て感じた恐怖のことだ。この一地点にリアリティが与えられるため，その地点に至るまでの直接の意匠である「ソーニャの中にリザヴェータが見える」もまた間接的にリアリティを得る。この間接性をほんの少し補うものが，先にあげた二人の個人的社会的類似であり(6)，更に補うのが，次に述べる告白直前の場面の法則化である。

告白直前の場面はリザヴェータ殺害直前の場面の反復（文章が殆んど同じ）である。しかし告白直前の場面において新たにつけ加わったものがあった。主人公の子供の顔を目にしたさいの恐怖がそれだ。殺害直前の場面では恐怖は描かれていない。描かれていないが，それは彼が動転していたため自分の恐怖に人間的に対応できず，錯乱したまま斧をふりおろしてしまったのだ，と云うことを告白直前の描写が明らかにしている。つまり，リザヴェータ，子供，恐怖の三つを告白直前の場面は反復している。先に述べたように，この反復のうち二つ（子供，恐怖）は既にリアリティを得ている。反復そのものがリアリティを得ていることになる。これは即ち前節で述べた「法則化」ということだ。この法則化に至るための直接の意匠であるリザヴェータもまた間接的に法則化され，彼女が告白直前の場面に現われてくることが間接的に必然と見なされる。従って彼女がソーニャの中に現われてもよいのである。こうして先に述べた間接性は補完される(7)。

以上のことが一瞬のうちになされる。言いかえると，以上に述べたさまざまな動きが同時に（先行後行の区別なく）発生し互いの力を増幅しあい，場面を必然化へと導く。筆者は平明を狙って上のような順で説明したのにすぎない。しかし，それらの動きの核となっているのが「子供の問題」であることに変りはない。ただ筆者に気がかりなのは，この問題がどこまで理解されるかだ。完全に理解するためには知的であるだけでは足りない(8)。子供じみた（チャイルディシュ）状態へと退化することなく，ますます子供のように（チャイルドライク）なることができる(9)」可能性を持った「自己」を現代の読者がどこまで勇気をもって意識化できるかによるだろう。

これで「主人公にリザヴェータがソーニャの中に見えた」という記述が何故読者に必然と感じられるのかについて，一応述べ終ったと思われる。本稿第1節の問題点1は解決した。つまり，読者にそれが必然と感じられるように作者が仕組んだということになる。即ち，ドストエフスキイは第三章の終りで読者

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

に謎をかけ，告白直前の場面で初めてそのタネを明かしているのだろう。従って，問題点2は，同一化を第三章の終りにまで溯及させるのが正しい，と云う風に解決される。また〔答の1〕は主人公の視点にのみ立てば，同一化の真の理由を避けているにも拘らず，正しいことになる。

この同一化の場面を反復し強調しているのが，次の十字架の場面である。

4

十字架をソーニャが主人公に渡す場面は，告白の場面のリフレインであると同時に，その場面の簡潔な要約となっている。簡単に述べる。

主人公は自首をしにゆく直前，ソーニャから糸杉の十字架をかけてもらう。ソーニャは銅の十字架をかける。ところが，ここで主人公が嘘をつく。

「ぼくはこれとまた同じような十字架を二つ知っているよ。銀の十字架と聖像さ。あのとき婆さんの胸に投げつけてきたのさ」(403)

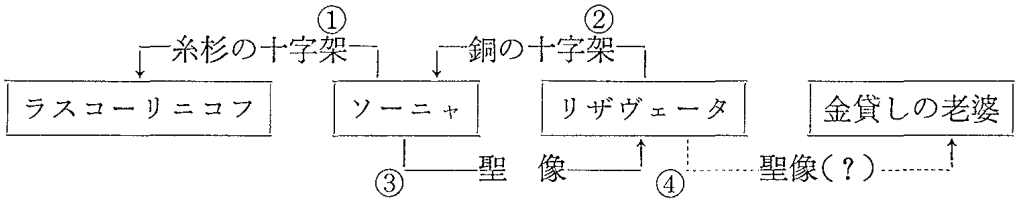
彼は「これと同じような十字架を二つ知っている」，ここまでは正しい。何故なら老婆の首の紐には「二つの十字架があった。糸杉と銅の十字架だ。さらにエナメルの聖像があった」(64) からだ。糸杉と銅の十字架をたしかに彼は知っている。しかし，次が嘘だ。銀の十字架と聖像ではない。

銀の十字架と聖像をさして「二つの十字架」というのが間違っているというのではない。小説の他の部分で十字架と聖像はソーニャによって同一視されている。

「リザヴェータと私は十字架（訳注：十字架は複数形）を取りかえたのです。あの人は私に十字架を，私はあの人に聖像をあげたのです」(324)

だから「二つの十字架」のうちの一つが聖像であるとしても構わない。銀の十字架というのが嘘だ。この嘘は従ってソーニャには判らない。何故彼は嘘をついたのか。

この問いを解くため，彼らの十字架交換の図を描いて考えてみよう。



図の①と②と③については既に述べた。矢印は与える方向を意味する。ここでは②の銅の十字架が最も大きな働きをする。それはソーニャがリザヴェータからもらった十字架であり，ラスコーリニコフがソーニャからもらう糸杉の十

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

字架と一対になって，この三人を結びつける。十字架はキリストの苦難に従おうとすることの象徴でもあり，キリストに従えば人類に救いの希望があることの象徴でもあるが（ルカ，$9^{21\sim27}$，他），後者の象徴は福音書における「子供」の意味するところと重なる(4)。

殺される直前のリザヴェータの中の子供（≒銅の十字架）の恐怖にみちた顔がソーニャに現われ（≒銅の十字架を受けとる），リザヴェータと同一化されたソーニャの中に子供（≒糸杉の十字架）の恐怖にみちた顔が現われ，それが主人公に伝わる（≒糸杉の十字架を受けとる），このように十字架は子供と平行関係を保ちながら，リザヴェータとソーニャの同一化の場面を反復する。

ところで，破線部④は何を意味するのか。

殺された金貸しの老婆の身につけていた聖像がリザヴェータのもの，即ちソーニャがリザヴェータに与えた聖像ではないかという疑いが残るため，破線にした。リザヴェータの白痴のごとき善良さ無欲さを念頭におけば，首ヒモに財布と共に二つの十字架と聖像までぶら下げている強欲な金貸しの老婆が，その聖像をリザヴェータにねだり，リザヴェータはそれを簡単に与えてしまったのではないか，と云う疑いが残る。可能性はあるだろう。

もしこの可能性を認めるとしたら次のようになる。

ソーニャはリザヴェータに与えた聖像によって金貸しと結びつく。そして実際，自己犠牲的なソーニャにとっては主人公のリザヴェータ（≒ソーニャ）殺しは殆んど問題にならないのに対し，金貸しの老婆を殺したことは非難の中心になる。

主人公は逆にリザヴェータを殺したことを後悔するが，金貸しを殺したことについては断固悔い改めを拒否する。つまり，いま主人公の視点から離れて考えると，主人公はソーニャと結びつくことによってリザヴェータとも結びついていた。ところが皮肉なことに，上の破線の可能性を認めるとすると，彼はソーニャを介して金貸しの老婆とも結びついていたことになる。

主人公の嘘は破線の可能性を認めることによって初めて説明可能になる。即ち（主人公の視点に立つと）彼は嘘をつくことによって無意識のうちに事実を混乱させ，自分と金貸しの老婆との関係を訳のわからないものにしようとしていたことになる。

ここで主人公が金貸しの老婆を背後から顔も見ないで殺したことを想起すべきだろう。

ラスコーリニコフとリザヴェータとソーニャは告白の場面で明らかなように，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

「子供の顔」によって三位一体となり，十字架によってそれは反復された。一方，上の図での破線部の可能性は全く否定されたわけではない。子供と十字架がその意義において重なりながら平行関係を保っていたことを考え合わせれば，その破線部の可能性は次のことを暗示しているのだろう。即ち，主人公は金貸しの老婆を背後から顔も見ずに殺してしまった。背後からではなく顔を見ながら斧をふりかざせば，その胴欲な老婆の顔にも「恐怖にみちた子供の顔」が現われたかもしれないのである。

以上のようにリザヴェータを殺すという伏線は「子供」の問題を核にして展開している。これは「罪と罰」創作ノートでリザヴェータの遺児であるシャーシャという少女が，その子供としての存在によって主人公を苦しめる役割を負っていたことと響きあっていたこと(10)になる。

注(1) R. Peace, "Dostoyevsky", Cambridge, 1971, p. 40.

(2) たとえばキルポーチンは次のように述べている。

「ソーニャという存在によって非常に明白に示されているのは，人類が救済を必要としている，ということだ。ソーニャの庇護者となることでラスコーリニコフの反乱は，まず第一にそして何よりも，社会的公平を求めての闘い，黙示録にいう新しいエルサレム，ユートピア社会主義者達の唱える黄金時代を求めての闘い，という意義や価値を付与されている。ソーニャは，持たざる者たちの中でも最も劣悪な状態に置かれている。ソーニャを救出し解放するということは，すべての者たち，リザヴェータ，マルメラードフ，ドゥーニャ，アカーキィ・アカーキエヴィチ，哀れなエウゲーニイ，を救出し解放することを意味するだろう」

(В. Я. Кирпотин, "Разочарование и крушение Родиона Раскольникова" M., 1970. стр. 198.)

(3) Peace, p. 43.

(4) ドストエフスキイが子供の問題を重要視し，くりかえしその作品中で取りあげているのは，ひとつにはキリスト教思想，ひとつにはシラーの影響（シラーはルソーから影響を受けている）があったのだろう。即ち，福音書において子供は「へりくだる人」（マタ，18・4）「最も取るに足りない者」（ルカ，9・48）と述べられ，貧しい人（ルカ，6・21）とともに容易に神の国に入りうる者とされる。貧しい人が神の国の近くにいるのは，物質的富を持たないからである。このため彼は生活の豊かさに惑わされることなく，自分の心の貧しさ，自分が子供のように無知であり弱い者であることを，容易に気づきうる故，神の国の近くにいることになる。子供はこのように心の貧しさの象徴であると共に「救い」の象徴でもある。一方，シラーにおいて子供は主に「自然の原野に咲く草花，森の樹木は人間の生命を呼吸し，動物たちは人間の言葉をもって話しかけ，神々もまた人間とともにたわむれたホメロス的世界」（金田民夫「シラーの芸術論」理想社，S．49．163頁）の象徴であり，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

これはまたドストエフスキイの言う「活き活きとした生活」とも重なる。ラスコーリニコフが少女ポーレンカと話をした直後,「生活は存在する」(147) と確信するのも,エピローグにおいて主人公が「哲学問答にかわって訪れたのは生活だった」(422) と感じるとき初めて子供のような囚人達に融和できるのも,シラーの影響があるのだろう。

フランス・ユートピアンの影響も大きいのだろうが,筆者はまだ判断を下すに至っていない。

(5) これを認めない読者がいることも確かだ。しかし,認めないと例えば小林秀雄氏の「『罪と罰』についてⅠ」のように読み違え (「新訂小林秀雄全集」第六巻新潮社, S. 53, 52頁),認めると同氏の「『罪と罰』についてⅡ」(上記全集第六巻245頁) のように正しい読みに近づく。

(6) 既に述べたように二人は余り似ていないので,冷静な読者にはこのようなことは起こらないかもしれない。一方,小説の渦に巻きこまれている読者は喜んで二人の類似点のみを思いうかべるだろう。

(7) 法則化された告白直前の場面を軸に,ピースのあげた更に大きな場面どうしの類似によって,第五部第四章全体が間接的に法則化され必然化される。

(8) 同じことを小林秀雄氏が「『罪と罰』について Ⅱ」(既出, 245頁) で指摘している。

(9) アルフレッド・ペルレス (筒井正明訳)「我が友ヘンリー・ミラー」立風書房, S. 49, P. 254.

(10) 「なぜすべてが失われたのだ。子供だって? 誰がいったい子供を愛してはいけないと言うのだ。本当に私は善良になれないのだろうか」(ナウカ版全集第7巻, 80頁)

「シャーシャ, 本当に私はシャーシャを愛せないのだろうか」(同上, 90頁)

主人公においては子供を愛する能力のない人間は善良ではなく,すべてを失っていることになる。即ちシャーシャの役割は子供を目の前にした殺人者のジレンマをさそいだすことにあったと思われる。このジレンマは決定稿において,斧をふりかざしてリザヴェータの中の子供の顔と向いあっているラスコーリニコフのジレンマと似ている。

О "детях" в романе《Преступление и наказание》

——О Лизавете

Сюндзи ХАГИВАРА

Автор этой статьи анализирует, как слово "дети" играет символическую роль в содержании романа "Преступление и наказание". Здесь анализируется не функция слова "дети" в романе в собственном значении этого слова, а функция характерной особенности детей в индивидуальности Лизаветы,

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

Сони, Раскольникова и Алены Ивановны. (Например, Раскольников увидел детский испуг в лице Лизаветы, когда он бросился на нее с топором, и в этой сцене автор романа употребляет слово “детский”, как своеобразный символ живой жизни, которую он отрезал от себя. Многократное употребление слова “детский”, как символа живой жизни, можно найти даже в сцене признания главного героя перед Соней)

Кроме того, автор этой статьи рассматривает возможность символического понимания слова “детский” в этом романе тем, кто хочет прочитать «Преступление и наказание».

NII-Electronic Library Service